福祉さとやまべ

発行　松本市社会福祉協議会里山辺支会
編集　福祉さとやまべ編集委員会
印刷　藤原印刷株式会社

「福祉さとやまべ」第一〇〇号発行に当たって

福祉さとやまべ編集委員会
委員長　小岩井　里美

「福祉さとやまべ」の発行が、今回で第一〇〇号を迎え、カラー版の記念号となりました。初回発行より年三回の発行で三十三年間、歴史を感じます。

これまで、多くの方から寄稿していただき、里山辺の福祉に関わる内容を地域の皆さんに発信することができました。

今まで寄稿していただいた皆様に感謝申しあげます。

さて、今回第一〇〇号を記念して歴代の社会福祉協議会里山辺支会長の方の中から、紙面の都合上三名の方に社会福祉協議会で実施してきたいくつかの行事について、行事の経緯や当時の思い出等の原稿を寄稿していただきました。

今後も、地域の皆様に里山辺地区の福祉活動について理解を深めていただけるよう「福祉さとやまべ」を発信して参りますので、ご意見・ご感想等いただけると幸いです。

令和七年度福祉さとやまべ編集委員

平成二十年代の福祉活動と今後の取り組みについて
～福祉を語るつどい～

平成二十～二十三年度　支会長　二木　義照

平成二十年代は、福祉活動が活発に動き出した頃でした。地域住民相互の社会的つながりが希薄化しており、「自助・共助・公助」の重要性が改めて認識されました。特に災害時など、社会的弱者である子どもや高齢者に行き届いた福祉が必要です。

「福祉を語るつどい」は、前身となる「福祉を語る会」が平成十七年に開催されたことを皮切りに始まりました。

以来、毎年様々な分野で活躍する講師の方をお呼びして、地区の皆様に福祉活動の重要性を伝えるべく講演会を開催しています。

住んで楽しい、訪ねて嬉しい、ときめきの里山辺の創造に向け、住民が主役になって地域福祉の向上に努めたいものです。

令和六年度のテーマは
「能登半島地震」でした

平成二十五年度開催時の様子

《戦没者・開拓物故者追悼平和祈念式典》開催の経緯と意義

平成二十六～二十七年度 支会長 小岩井 俊忠

世界列強の海外進出が進む中、日本でも戦死将兵の慰霊と国威高揚を目的に《忠魂碑》が各地で建立されました。里山辺地区でも建立されますが、第二次世界大戦後、米国進駐軍の駐留と共に碑は撤去されたり隠されたりしました。

しかし、昭和三十年代に入ると「戦争の惨禍への反省と犠牲者追悼の必要性」が再び叫ばれるようになり、各地で行政が中心となり『慰霊祭』が持たれることとなりました。当地区では広澤寺・兎川寺両御住職の読経による式典が厳かに執り行われ、遺族や地区代表者が参列しました。

平成に入り「行政が宗教行事」に関わることへの批判と行政訴訟が相次ぎ、松本市も「行政事業から宗教色を排除する」ことを決めました。これを受けて町会連合会と社会福祉協議会が中心となり「宗教性を除去しての戦争犠牲者の追悼と共に平和を祈念する形での新たな式典のあり方」が模索され、平成二十五年度より現在の形式での式典が持たれることとなりました。

戦後八十年、今も世界各地に紛争や戦争が絶えない中、私たちは改めて平和の尊さを考えてみたいものです。

平成二十六年度開催時の様子

コロナ禍でのふれあい会食会

令和二～四年度 支会長 坪田 利文

松本市社協のマスコットキャラクター「つむぎちゃん」と共に

令和二年から世界に蔓延したコロナにより前年度まで実施していた、里山辺地区内の六五歳以上（単身）高齢者を主体の「ふれあい会食会」も中止せざるを得なくなりました。

そんな中でも、里山辺地区として少しでも高齢者の皆様に楽しんでもらおうと熟慮の結果、ボランティア部員と民生委員の協力により、お菓子の配食（四三六名）と「ふれあいお楽しみ会」（七三名）の開催で「楽しかった、お菓子もやわらかく美味しい」等々の感想をいただきました。

今後も社協活動を推進していくよう考えています。

平成二十二年度開催時の様子

コロナ禍で配食のお菓子

編集後記

令和七年度の編集委員は次の通りです。

委員長（町会連合会）小岩井里美
民生・児童委員会　山田　克美
子ども会育成会　矢崎　基
日赤奉仕団福祉部　赤羽亜希子
ボランティア部会　倉田　慶子